

山口県立美術館ニュース

# 天花

第47号

TENGE

平成3年3月1日  
発行山口県立美術館



雲谷等益 楼閣山水図

# 表紙作品解説

雲谷等益

天正19年—正保元年(1591-1644)

## 楼閣山水図

江戸時代初期

紙本墨画淡彩金砂子

6曲屏風1双 各155.8×362.9cm

雲谷等益は雲谷派の始祖等顔の次男として生まれた。母は内林氏女。俗姓原氏、名は元直。幼名は宮法師のち治兵衛尉を名乗り、友雲とも号した。兄にのちに等屋を名乗る直正がいたが、元和四年(一六一八)に父等顔が没したあと、等屋の早逝のため雲谷宗家を継承した。毛利家の御用絵師として周防・長門を中心に活動したが、大徳寺の塔頭での盛んな障壁画制作も知られている。等益の活躍期は江戸時代初期。雲谷派の流派体制の整備期と位置付けられる子らに分家をたてさせ、みずからも大知行取りとなっている。

等益の作品はかなりの数があるが、年紀のあるものがなく、様式変遷をたどるのは容易ではない。父等顔の様式を基盤におきつつ、大和絵や狩野派の絵画などの様式を取り入れながら様々な試みをおこない、独自の画風をみせている。

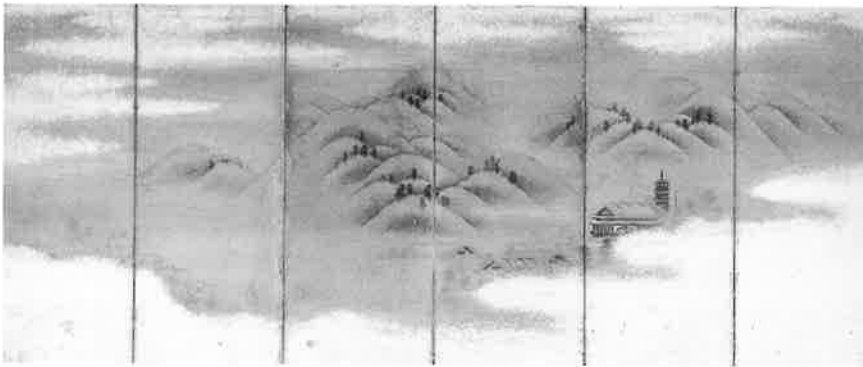
ここに掲載した当館蔵「楼閣山水図」屏風もそうした等益の試みをあらわす一点である。各隻に「云谷」(白文瓢印)、「等益」(朱文方印)がおされており、いずれも疑いをいれないものである。

この作品の特徴であるなだらかな山なみは、一見して奇妙な印象をあ

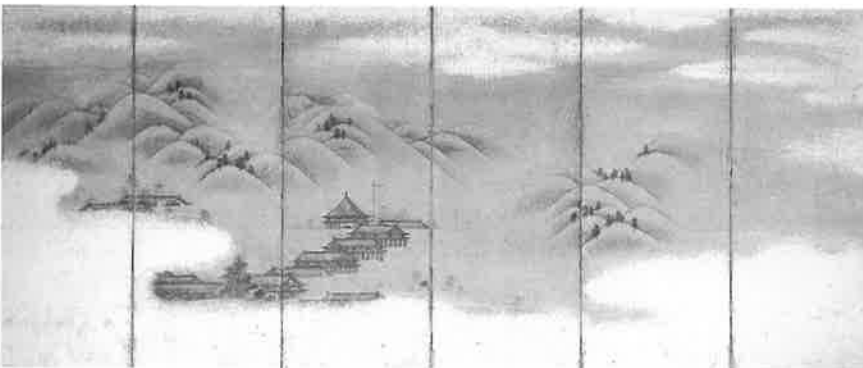
たえるが、これは等益固有の表現として数点の作品にあらわれる。大和の遠山を思わせる山岳描写は、おそらく雪舟の高彦敬にならった山水図などから導入したもので、雪舟の真体山水図に学んだ作品をみなれた

目には異彩をはなつて見えるのである。当時の評価がどのようなものであったかはわからないが、こうした表現を受け継ぐ雲谷派画人はどうやらあらわれなかったようである。

(福島恒徳研究員)



右隻



左隻

# ORO DEL PERU ペルー黄金博物館展

## ——アンデス文明の秘宝——

一四九二年一月二日、クリストファー・コロンブスがバハマ諸島の一角に上陸して以来、「新大陸」

アメリカは「旧大陸」の探検家たちによってその姿をしだいに明らかにされつつあった。彼ら探検家たちはキリスト教の熱心な布教者でもあったが、同時に海賊であり、また征服者でもあった。彼らのなかでもメキシコのアステカ王国を滅ぼしたエルナン・コルテスと、インカ帝国を滅ぼしたフランシスコ・ピサロは、莫大な金銀財宝の略奪にまつわる血なまぐさい物語の主人公として、とくにその名を歴史に残している。

ところで、「発見」以前のアメリカ大陸では、高い文化発展を遂げていた地域がふたつ存在していた。ひとつはマヤやアステカ文明を生み出した現在のメキシコ、グアテマラを中心とするメソアメリカ地域であり、もうひとつがインカ帝国によって最終的に統一されたペルーとボリビア高原を中心とする中央アンデス地域である。両地域の文化は多くの点で相違点が認められるにもかかわらず、両者に共通する基本的性格として、鉄器を知らない新石器的文化の段階にとどまっていたことを挙げる事ができる。両文化とも金、銀、銅、

青銅は知られていたが、金属器はおもに支配階級の装飾品や祭祀のためのものであり、日常的な道具は主に石器や土器が用いられていたらしい。このようないわば取り残されていた古代文明が、ヨーロッパ近代文明との接触によって一瞬のうちに滅ぼされ、そこに全く新しい世界が築かれたということは、まさに世界史上の大事件であったといえるにちがいない。

中央アンデス地域に土器があらわれたのは、紀元前二一〇〇年から前一四〇〇年までの草創期と呼ばれる時期である。つづく紀元前一四〇〇年から前四〇〇年までの時期になると特有の芸術様式があらわれ、チャビン様式（文化、時代）と総称されている。この時代になると、土器は技術的にも芸術的にも飛躍的に進歩をとげ、日常的な道具類も前時代にくらべてめだつて種類がふえてくる。また現在発見されている最も古い金製品は、この時期のものといわれている。紀元前五〇〇年頃になるとチャビン様式は衰退し、その後各地で地方文化が成立する。たとえば写実的な人物表現がなされた彫塑土器で有名なモチーカ文化、不思議な地上絵でとりわけ有名なナスカ文化、そ

してこのふたつにややおくれるかたちでティティカカ湖沿岸に生まれた、多色の彩文土器で有名なティアワナコ文化である。中央アンデス地域で最初に青銅を作ったのは、このティアワナコ文化と考えられている。この頃になると、農業技術、土木技術が著しく進歩し、織物や土器、金製品の加工その他多くの工芸技術も大きく発展した。その後の五五〇年頃から九〇〇年頃までは、中央アンデス一帯を統一した帝国の名をとって、ワリ帝国期、あるいはたんにワリ期と呼ばれている。ワリの拡大は都市的な住居形態を他地域に広げることになり、中央アンデス地域に等質の文化をもたらした。しかしこの現象も長くは続かず、再び地方文化がおこりはじめる。とくに大きな力をもったものがチムー文化である。チムーの首都チャンチャンは土壁で囲まれた広大な面積をもつ都市であり、その中には広場、貯水池、住居、倉庫などが整然と作られていたという。銅、青銅、金銀工芸に関しては、この時期に最高の水準に達したとさえいわれている。こうした長い歴史の終わり一五世紀後半に、チムー帝国をはじめ中央アンデス全域に数多く存在した王国や部族のほとんどが、



埋葬用の腕



貴人像象形トゥミ

最終的にインカ帝国に統一されることになるのである。

今回の展覧会では、中央アンデス地域で栄えた諸文化が生み出した様々な金製品を数多く展示している。インカ帝国をはじめとするこれら諸文化において、金はきわめて特殊な役割をなっていた存在だった。金は神やあるいは神に近い人々に捧げられた金属であり、あるいはまた死者とともにある金属であった。インカ帝国の太陽の神殿には黄金がきらめき、また神殿で使われる様々な容器なども金でつくられていた。戦士たちも黄金の胸当てで着飾ったり、また護符として黄金を身につけていたという。帝国の拡大にともなう、インカ皇帝は征服した部族に対し、宮殿と神殿に捧げるための黄金を貢物として要求した。その結果、帝国の首都クスコには、あのピサロたちが驚嘆したほどの莫大な黄金が集められていたのである。

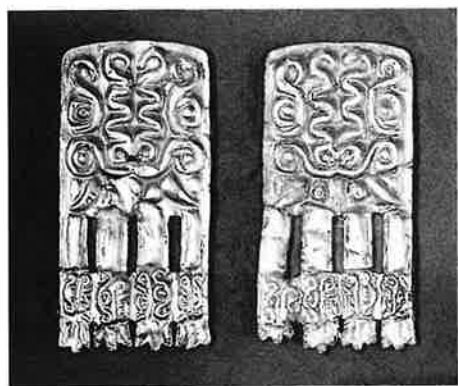
不幸にして多くの金製品は略奪者たちの手で次々と溶かされ、延棒にされてヨーロッパへ送られてしまっただが、その難をのがれ現在まで伝えられた貴重な作品は、熱心な研究者たちによって大切に保管されてきた。今回の展覧会に出品された二五〇点

の作品も、ペルーの黄金製品の研究・収集の第一人者、ミゲル・ムヒカ・ガヨ氏によって設立されたペルー黄金博物館の所蔵品である。

「旧大陸」の西欧がすでに羅針盤の発明によって可能となった大航海時代をむかえようとしていた頃、「新大陸」では全く別の時間が太古からゆるやかに流れていた。ついに文字をもたぬまま一六世紀まで取り残されるアンデスの古代文明に生き残った人々の遺品は、現代の私たちの目にどのような映るだろうか。私たちはこれら発掘された様々な作品の造形を通じてのみ、「新大陸」発見以前の、あのゆるやかな時間の流れを感じることはできるばかりなのである。

(齋藤郁夫学芸員)

会期	平成3年3月7日(木)
	3月4日7日(日)
料金	一般 一〇〇〇円(八〇〇)
	高大生 七〇〇円(五〇〇)
	小中生 五〇〇円(三〇〇)
	( )内は20名以上の団体料金



猫科動物神文耳飾り



神人動物文様付きコップ



鳥像付き首飾り



男性立像、女性立像



輿の模型

## 展覧会案内

# 浮世絵歌川派3巨匠展

## —国貞、国芳、広重の世界—

ほぼ一九世紀初期から中期まで、年号でいえば文化・文政から明治にいたるまでの幕末期に、新たな展開をとげ、隆盛した浮世絵は、ひとまとめにしていわゆる「末期浮世絵」あるいは「後期浮世絵」などと総称されている。しかし往々にしてこの呼称のニュアンスの中には、けばけばしい色彩や、ごてごてとパターン化した画面構成、あるいはあくどいまでに誇張された描写や凄惨な殺戮場面といった、いささかウンザリするようなアクの強い錦絵が、イメージジされて語られることが多いように

ある。たしかに、この時期の浮世絵の特徴として、当時の騒乱と変転の世相の中で、しだいに頹廢と享樂の色を濃くしながら、妙に華美で、生々しい表現がもてはやされたという側面を指摘することは可能だろう。ただ、こうした末期浮世絵も、いまま少し詳しくながめてみた場合、文化・文政期、さらには天保の改革を経た後の弘化・嘉永期とは、それぞれの時期の世相を反映しつつ、微妙に画風や雰囲気に変化していることに気づくのである。

今回この展覧会でとりあげられた国貞（三代豊国）、国芳、広重は、文化年間から幕末期（広重は安政五年没。国芳は文久元年没。国貞は元治元年没）までの約半世紀の間、旺盛な制作活動を行ない、それぞれ特色ある画風を確立した絵師たちである。とくにそのなかでも広重は、葛飾北斎と並んで、明治以降、早くから海外に紹介され、江戸期の浮世絵史の掉尾を飾った風景版画の大成者として、高い評価を獲得しているところ。一方の国貞や国芳の評価となると、同じ歌川派の絵師であり、当時、広重と覇を競い合ったにもかかわらず、近年になるまで、それほど強く問題にされたことがなかった

ようである。つまり化政期以降、かなり意欲的に展開されたといってもよい国貞や国芳の仕事は、作品自体は巷間に比較的多く流布しているながらも、末期浮世絵の一連の喧噪と混沌の様相のうちにすっかり包みこまれてしまい、その実相と芸術性が、浮世絵史の上に明確に位置づけられないままで、ごく最近にまで至っていったといえよう。しかし二、三〇年ほど前から、じよじよに研究者のあいだにも、それまで等閑視されてきた観のある末期浮世絵に注目する気運が高まり、以後相次ぐ浮世絵全集の刊行の中には、この国貞、国芳、さらには菊川英山や溪斎英泉などの末期浮世絵の絵師たちをそれぞれ詳しく論じようというものも出てきた。また、この時期のこれらの絵師たちの作品を、個々に、あるいは時代、地域、流派などのように系統的にまとめて紹介しようという展覧会も、

各地の美術館、博物館で次々と行なわれるようになり、幕末期の浮世絵研究は近年とくに厚味を増してきつつあるといえる。

幕末期歌川派を代表する三人の絵師に焦点をしばったこのたびの展覧会もまた、こうした動きの延長上にあるといっていだろう。二四七点

にもものぼる作品のすべては、早くから独自の見識をもとに浮世絵収集を行なってこられた浦上敏朗氏のコレクションである。つまり今回の出品作品は、浦上氏自身がとくに思い入れをこめて集めてこられたこれら三人の歌川派絵師の画業を、より詳しくながめるため、氏自身がセレクトしたものである。

◇ ◇ ◇

この三人の絵師は、嘉永六年刊の「江戸寿那古細撰記」に「豊国、国芳、広重」と記述されるように、当時からすでに「役者絵の国貞」、「武者絵の国芳」、「名所絵の広重」と並び称されるほどの定評を勝ち得ていた。三人の画風は、このように三者三様、それぞれ特色を発揮したものであったが、それと同時に、ともに共通して幕末期の時代相をきわめて明瞭に画面の中に反映させたものでもあった。

国貞が好んで描いた面長、受け唇、猫背猪首といった一種特異な嬌態をあらわす美人は、頹廢や享樂の臭いを強く漂わせながらも、その背景には当時しだいに文化として醸成されつつあったいわゆる「いき」と呼ばれた、庶民感覚や生活感情を投射する独特の美意識を、具体的な形で



歌川国貞 浄瑠璃づくし 無間乃鐘段



歌川国貞 当世美人合 俄



歌川国貞 当世三十世相 世事がよさ相



歌川国芳 讃岐院巻風をして爲朝をすくふ図



らわしたものであるといえよう。また、人の意表をつくスケールと迫力をもつ国芳の武者絵の底流には、洋風表現を自分なりに咀嚼したきわめて近代的な写実性がひそんでいるし、さらにその戯画の中にも近代的な造形感覚を駆使したデフォルメの例を探し出すことは容易である。温雅な抒情性をあふれさせた広重の名所絵においても、その基調には、実景写生にもとづいた強い造形意識があることを見逃がすべきではないし、そうした道中風俗物とでもよべるような画題がもてはやされたこと自体、当時の庶民がいだく旅や異国の地へのあこがれを反映した現象であったことはたしかだろう。

今回の出品作品の中に、これら三者相互の共同制作となるものが数点ふくまれていることも興味深い。たとえば、三枚続きの一枚ずつを国貞、国芳、英泉が描いた「宝船七福神」、さらにシリーズ物として国貞、国芳、広重がそれぞれ分担作画した「東海道五十三対」、国貞が人物景物を、背景の風景を二代広重が描いた「江戸自慢三十六興」、国貞が人物を、広重が背後のコマ絵内の風景を描いた「双筆五十三次」などである。たとえそれらの制作が、スターを揃え



歌川国芳 名所江戸百景 亀戸天神境内



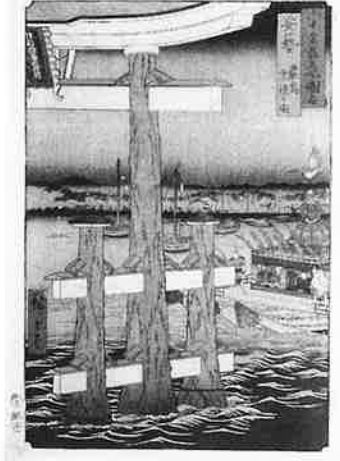
歌川国芳 荷宝蔵壁のむだ書



歌川国芳 みかけハこハあがとんだいい人



歌川広重 京都名所之内 あらし山満花



歌川広重 六十余州名所図絵 安芸

会期	4月26日(金)～6月9日(日)
休館日	月曜日(ただし4月29日(月)、5月6日(月)は開館、4月30日(火)、5月7日(火)は休館)
入館料	一般 900円(700)
	高大生 700円(500)
	小中生 500円(300)
( )内は20人以上の団体料金	

することに より実利をあげようという版元の思わくのあらわれであったとしても、そうした行為そのものの中から、同時代にライバルとして画技を競いながらも、互いの特徴を理解し、意識しあった彼らの姿勢や関係を窺い知ることができるのはおもしろい。

展覧会では、それぞれの絵師の最も得意とする分野の作品が中心となつてはいるが、彼らの作域の幅の広さをながめる上からも、かなりジャンルを越えた作品選択がなされている。江戸末期、華麗に花ひらき、繁栄を誇った歌川一門の中でも、とくにきわだった活躍をみせたこの国貞、国芳、広重の三人の画業は、近世から近代への日本絵画の流れや展開を理解しようとする時にも、きわめて大きな意味をもつといえるだろう。

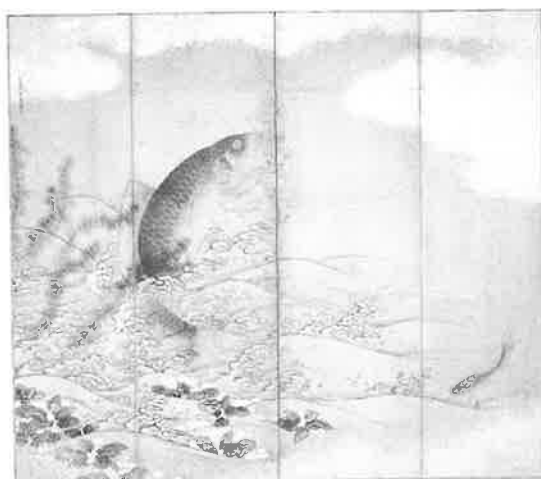
(菊屋吉生専門学芸員)



## 新収蔵品一覧 (平成2年度前期分)



大辻清司 モダンアーティストの肖像



雲谷等益 鯉図

### 購入

No.	作品名	作家	制作年	技法・形状	寸法(cm)
1	鯉図	雲谷等益	17世紀中頃	屏風装4曲1隻	150.4×171.8
2	萩長寿楽置物	三輪休和	1933	陶	高さ 42
3	逃れゆく思念	深井隆	1986	立体(木彫)	高さ 125
4	無題	ダン・グレアム	1990	立体	250×250×300
5	カストリ時代	林忠彦	1946～1957	写真 20点	
6	秋田	木村伊兵衛	1952～1965	写真 20点	
7	裏日本	濱谷浩	1940～1958	写真 20点	
8	ピカドン	福島菊次郎	1951～1969	写真 24点	
9	光輝く女体 他	福田勝治	1925～1965	写真 20点	
10	モダンアーティストの肖像 他	大辻清司	1949～1957	写真 20点	

### 寄贈

No.	作品名	作者	制作年	技法・形状	寸法(cm)
1	作品2	石田順治	1939	油彩・キャンバス	81.2×116.2
2	萩鉢	大和保男	1989	陶	口径44 高さ5.5
3	萩茶碗	大和保男	1988	陶	口径13 底径7 高さ7
4	萩水指	大和保男	1990	陶	口径19.8 高さ16.2
5	萩炎箔文陶笛	大和保男	1988	陶	30.8×31.2×7.5
6	青空天国 他	金井精一	1949～1952	写真 13点	

\*なお平成2年度新収蔵品のうち後期分については、号をあらためて紹介します。

# 雪舟流画人 雲溪永怡

雪舟弟子と伝える画人は多い。しかしそれらのなかで雪舟に直接師事したと認められる人は多くない。世に「雪舟流」というが、その展開の実態は曖昧なままなのである。雪舟本人に画法の伝授という意識があったことは確かで、教えを受けた弟子たちによる「雪舟流」の伝承も事実である。ただ二、三の弟子をのぞいて詳しい画歴がわからず、雪舟直弟子が確実視される画人でも、作品の鑑識が難しい場合が多い。

雪舟本人から画法伝授の証として与えられた作品、またはその写しが現存する画人が三人いる。「破墨山水図」（東京国立博物館蔵）の如水宗淵、「雪舟自画像」（模本藤田美術館蔵）の秋月等観、「山水小巻」（山口県立美術館蔵）の雲峰等悦である。この三人のほかには、『等伯画説』のいう三益等春や雪舟の画房雲谷庵の後住とされる惟馨周徳が有力な直弟子と考えられ、また等禅、等本、承虎、如寄、周耕、朱玉、元賀、雲

溪、牧松などの室町時代の画人たちにも注目すべきであろう。

ここでは、これらのうち現在二〇点ほどの作品がのこされている雲溪永怡にスポットをあて、その画事を一瞥してみたい。

雲溪の名は一六七六年に成立した狩野永納著『本朝画史』にはじめてあらわれる。それより前の雪舟系譜として重要な『等伯画説』中の系図や江月宗玩の墨蹟手控中の「画師の伝宗派図」には記載がない。『本朝画史』には、僧雲溪の諱は支山で、土岐氏の一族であると記し、雪舟を学んで山水、人物、花鳥をよくしたが、雪舟にはあまり似ないと評されている。またその作品にはみな天文（一五三二―一五五四）の年号があるとも伝える。これらの記述のうち、土岐氏の一族雲溪支山であるとするのは誤りであり、相国寺の雲溪支山との混同であることは明らかである。また『画工便覧』などは雲溪が高野山に住したといい、西南院には現に

雲溪永怡筆「釈迦三尊図」三幅対のあることが報告（松下隆章『室町水墨画第一輯』）されてはいるものの、「住高野山」という記述そのものについては、高野山で作画活動のあった斎藤等室（号曇溪）との混同の可能性があり、不明である。

現在山口県内に二件の雲溪永怡の作品がのこり、そのほかに現存する作品のなかにも、もとの地方にあったらしいものがあるので、雲溪が周防・長門地方で活動していたことはほぼ確かだと言える。『古画備考』に梶橋狩野家伝来の模本類のなかに永正二年（一五〇五）の雲溪永怡の款記があると記すので、雪舟最晩年の周防における直接的な師弟関係の可能性も考えられる。雪舟流画人の一人として注意しておくべき人物であると云ってよいだろう。

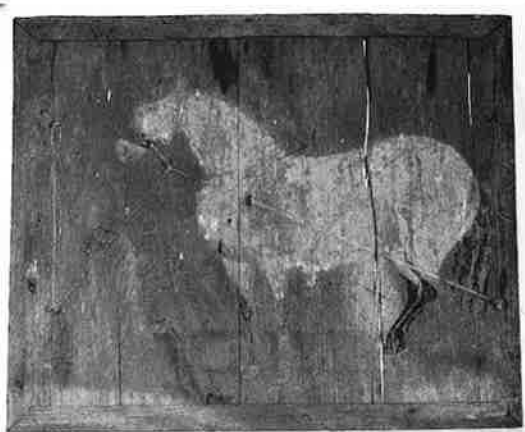
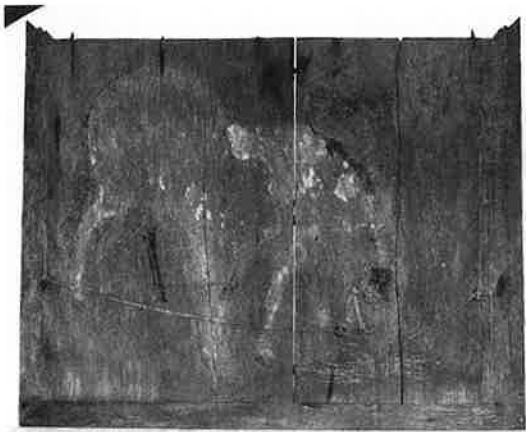
さて、雲溪永怡筆といわれる現存作品で、出版物に図版が掲載されているものうち、とくに注目すべきものを列挙してみれば以下のようなものとなる。

繫馬図 絵馬 一对 下関・住吉神社  
 釈迦三尊図 三幅 萩・東光寺  
 釈迦三尊図 三幅 常磐山文庫  
 達磨図 一幅 大分・大智寺  
 霊雲観桃図 一幅 正木美術館

瀟湘八景図 一卷 常磐山文庫  
 山水図 一幅 静嘉堂文庫  
 花籠図 一幅 常磐山文庫  
 蓮図 一幅 正木美術館  
 小禽図 一幅 バーク氏  
 龍・天人図 二面 広島・不動院

山水、人物、花鳥など多彩な画題をこなしており、技法も墨画にとどまらず、作品の形状も屏風こそないものの板絵馬や不動院天井画などあらゆるものに手をそめている。

図版（上段）を掲載した「繫馬図 絵馬」一对（住吉神社蔵）は板に白土地をつくり、剥落が甚だしいものの、白、黄土、朱、ピンクなどの顔料を用いてつながれた馬が描かれている。ごく近年発見され、各面にのこる落款から雲溪永怡の作品とわかり、さきごろ山口県の文化財に指定された。それにさきだつて山口県指定文化財となっていた絹本墨画淡彩「釈迦三尊図」（東光寺蔵、図版下段）に加えて新たに山口県内で雲溪作品が確認されたわけである。これに加えて紙本墨画淡彩「釈迦三尊図」（常磐山文庫蔵）は、場所は不詳ながら「金滝山大纏寺」旧蔵といわれていたが（『飛梅余香』）、これも山口県須佐町と同じ山号の同名寺院が現存する。



駿馬図絵馬一対（下関・住吉神社蔵）



釈迦三尊図三幅（萩・東大寺蔵）

また、山口市の善正寺に伝わる「内藤興盛像」は天文年間に描かれた大内義隆の重臣である同人の像を雲谷等竺が模写したものだ、その落款には「雲溪図」とあり、原図の作者が雲溪永怡であった可能性を示している。

そのほかに、山口から移建された不動院金堂の天井画には「天文九庚子冬十月日僧永怡筆」とあることから、天文九年（一四九〇）の山口における活動が知られ、山口市の八坂神社本殿に同年の雲溪の名の墨書があるとも伝えられている。ちなみに紙本墨画「小禽図」一幅（パーク氏蔵）の賛者太虚祥廓は天文四年（一五三五）に没しているので、同年以前の制作として知られている。

このように、雲溪が周防・長門地方で盛んに活動していたことは間違いない、その活躍期は天文年間ころとみてよいようである。紙数の関係で今回は知見の列挙に終わったが、雲溪の画事については別の機会に詳しく論じたいと考えている。

（福島恒徳研究員）

# 美術館から

〈大英博物館展おわる〉

大英博物館展が無事終了しました。この展覧会は、会期中の来館者数二六万人余を数え、館がオープンして以来の最多記録をのこしました。入館者の方がたはじめ、同展開催にかわりご支援いただいた関係各位、また共催のNHK、朝日新聞西部本社、さらに後援者の各位に厚くお礼を申しあげます。



## 〈移動美術館〉

次年度の山口県立美術館移動美術館は開催希望調査を集計、検討した結果、つぎの二町村に決定しました。

### 第一会場

熊毛郡田布施町

田布施町郷土館

11 / 1 (金) ~ 11 / 7 (木) 7日間

### 第二会場

阿武郡むつみ村

むつみ村・庁舎内多目的ホール

11 / 13 (水) ~ 11 / 17 (日) 5日間

## 〈常設展示案内〉

### 〔第一常設展示室〕

● 絵画展示室 (香月泰男記念室)

シベリア・シリーズ (Ⅱ) 2 / 28

1 / 5 / 12

● 絵画展示室 (小林和作記念室)

松田正平展 2 / 28 ~ 5 / 26

● 郷土工芸室

萩の茶陶 2 / 28 ~ 6 / 2

● 資料展示室

田村彰英の写真 2 / 28 ~ 5 / 19

### 〔第二常設展示室〕

植木茂の彫刻 3 / 5 ~ 6 / 16

## 展覧会記録

平成2年度

### 〈自主企画展〉

戦後写真・再生と展開展 (日本戦後写真史Ⅰ) 7 / 20 ~ 8 / 26

ダン・グレアム展 | 現代の美術V | 9 / 6 ~ 9 / 24

プリントッド・アート展 | 版画の變貌 | 11 / 2 ~ 12 / 2

● 県美展

第44回山口県美術展覧会 10 / 9 ~ 10 / 25

### 〈移動美術館〉

山陽町 10 / 25 ~ 10 / 29

久賀町 11 / 1 ~ 11 / 7

### 〈共催展〉

印象派・後期印象派展 4 / 14 ~ 5 / 13

アルフォンス・ミュシャ展 | アール・ヌーヴォの華 | 6 / 1 ~ 7 / 1

大英博物館 | 芸術と人間 | 展

パール | 黄金博物館展

平 3 / 1 ~ 5 / 2 ~ 20

平 3 / 3 ~ 7 / 4 ~ 7

学校美展

第43回山口県学校美術展覧会 12 / 6 ~ 12 / 9

団体展

伝統工芸展 5 / 18 ~ 5 / 27

美術文化展 7 / 7 ~ 7 / 15

モダン・アート展 8 / 30 ~ 9 / 2

### 〈卒業制作展〉

山口大学 平 3 / 2 ~ 28 ~ 3 / 3

山口芸術短期大学 平 3 / 2 ~ 28 ~ 3 / 3

## 山口県立美術館ニユース

### 「天花」

第四七号

平成三年三月一日発行

発行 山口県立美術館

〒753 山口市亀山町三一

☎ 〇九三 - 二五 - 七七七八

FAX 〇九三 - 二五 - 七七八

印刷 刷瞬報社写真印刷株式会社